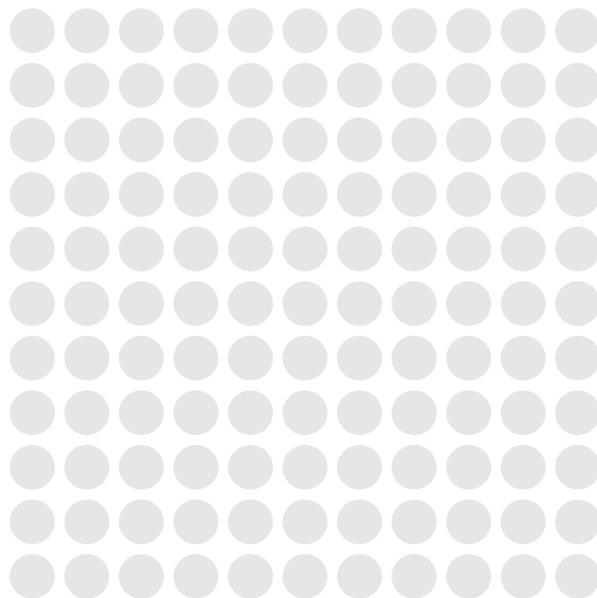
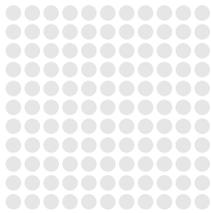


総合地球環境学研究所
研究推進戦略センター

超学際研究
コーディネーター育成事業
報告書

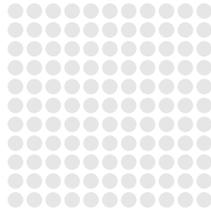
2014年3月28日





もくじ

はじめに 半藤逸樹	1
1 超学際研究コーディネーター育成事業の概要	2
2 スキル実践のためのワークショップ	4
「人間文化と地球環境のあるべき姿」の実施記録	
実施概要	4
ワークショップのようす	5
趣旨説明	6
議題提起	7
グループワークの成果発表	8
総括	10
一般参加者の感想	11
3 「育成事業」参加所員の感想	12
4 講師の講評	15
おわりに 窪田順平	17



はじめに

本報告書は、2013年度に実施した総合地球環境学研究所(地球研)「超学際研究コーディネーター育成事業」のまとめである。

地球研は、第Ⅱ期中期計画のなかで設計科学を掲げ、「研究成果の統合」と「科学と社会の連携」を推進し、トランスディシプリナリティ(超学際性)を強化してきた。この過程で、参加者と相互作用をはかるフォーラムやワークショップの企画と実践をくり返したものの、研究者のコーディネーション能力に限界を感じるようになった。そこで、各研究プロジェクトや各事業での超学際活動を活性化させるには、地球研所員の超学際研究コーディネーション能力を強化する必要があるという結論に至り、この事業の企画につながった。

超学際研究に限らず、共同研究の原則はco-design & co-productionである。地球研におけるプロジェクト研究や競争的資金による共同研究にしても、会議やワークショップで知の共創を実感できない限り、研究参加者のモチベーションは著しく低下する。また、いろいろな立場の参加者が混在する会議で、議論の進行に手間取ると、co-design & co-productionが成り立たなくなる。

そこで、本事業によって、超学際研究に不可欠なミーティングやワークショップでの所員のプレゼンテーション技術とファシリテーション技術の向上を狙い、超学際研究コーディネーターの育成をめざすこととなった。

これまで、外部の講師を招いた研修などはいくどかあったものの、企業研修や実践訓練をつうじて、地球研所員のプレゼンテーション技術とファシリテーション技術の強化を狙ったのは本事業が最初である。これをきっかけに、地球研コミュニティのキャパシティ・ビルディングにつながることをせつに望む。

2014年3月11日

総合地球環境学研究所 特任准教授

半藤 逸樹

超学際研究コーディネーター 育成事業の概要

● 事業名

超学際研究コーディネーター育成事業

● 担当部署

研究推進戦略センター 基幹研究ハブ部門

● 概要

研究プロジェクトならびに研究推進戦略センターおよび研究高度化支援センターによる事業の超学際活動を活性化させるため、企業による研修の受講および実践訓練をつうじて、超学際ミーティングやワークショップにおける所員のプレゼンテーション技術とファシリテーション技術の強化および地球研のキャパシティ・ビルディングを行なう。

● 背景と目的

未来設計イニシアティブ事業を担う研究推進戦略センター基幹研究ハブ部門では、終了プロジェクトの検証をしつつ、地球研研究プロジェクトの成果（概念、方法論、地域・研究者ネットワーク）の学際的統合とさまざまなステークホルダーと協働する「科学と社会との連携による知の共創」を軸とするトランスディシプリナリティ（超学際性）および設計科学的統合を実践する基幹研究プロジェクトの立ちあげを行っている。

地球研がこれらの超学際研究を推進する過程で、ステークホルダー参加型のワークショップを多用する基幹研究プロジェクトや基幹FS提案が増えており、第12回地球研フォーラム特別企画「地球環境研究を“共に創る”ワークショップ」（2013年8月23日）のなかで、研究者とステークホルダーがともに地球環境研究を企画立案することを試みた。しかしながら、研究者以外のステークホルダーに対するプレゼンテーションと、ワークショップにおけるファシリテーターとしての経験の乏しい研究者が多く、ステークホルダーから意見を引き出し、議論全体をコーディネートするに

は、現状のスキルでは限界があることが浮き彫りとなった。

これらをうけて本事業では、このようなスキルの限界を突破するために、個々の所員のプレゼンテーション技術とファシリテーション技術の向上とそれらを駆使する「超学際研究コーディネーター」を育成することを目的とする。

● 研修実施期間

2013年12月～2014年3月

一般企業による公開講座やセミナーを個別に受講

2014年3月18日

スキル実践のためのワークショップ（詳細は後述）

2014年3月28日

報告書作成



● 研修参加者

名前	職名	所属プロジェクト/センター
手代木 功基	プロジェクト研究員	砂漠化をめぐる風と人と土(R-07)
増田 忠義	プロジェクト上級研究員	東南アジアにおける持続可能な食料供給と健康リスク管理の流域設計(R-06)
橋本(渡部) 慧子	プロジェクト研究員	統合的水資源管理のための「水土の知」を設える(C-09-Init)
緒方 悠香	プロジェクト研究員	
渡辺 一生	プロジェクト研究員	東南アジア沿岸域におけるエリアケイパビリティの向上(D-05)
ヤップ・ミンリー	プロジェクト研究員	
松田 浩子	プロジェクト研究員	メガシティが地球環境に及ぼすインパクト——そのメカニズム解明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案(C-08)
大元 鈴子	プロジェクト研究員	
竹村 紫苑	プロジェクト研究員	地域環境知形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理(E-05-Init)
遠藤 愛子	准教授	
増原 直樹	プロジェクト研究員	アジア環太平洋地域の人間環境安全保障——水・エネルギー・食料連環(R-08-Init)
王 智弘	プロジェクト研究員	
熊澤 輝一	助教	
安富 奈津子	助教	研究高度化支援センター(CRP)
多田 洋平	技術補佐員	
半藤 逸樹	特任准教授	研究推進戦略センター(CRD)

● 研修の実施日程

研修先	研修名	日付	参加者(敬称略)
株式会社 インソース	プレゼンテーション研修	2013年 12月14日(土)	王、熊澤、緒方、手代木
		2013年 12月19日(木)	渡辺、遠藤、増田、多田
		2014年 1月14日(火)	松田、竹村
		2014年 1月24日(金)	増原、橋本、半藤、ヤップ
	ファシリテーション研修	2013年 12月17日(火)	遠藤、緒方
		2014年 1月 9日(木)	渡辺、松田、増原、安富、竹村
		2014年 1月29日(水)	熊澤、橋本、半藤、大元、多田
		2014年 2月 7日(金)	王、手代木、ヤップ
		2014年 2月17日(月)	増田
		2014年 2月19日(水)	渡辺、熊澤、手代木、安富、ヤップ
産能マネジメントスクール	ファシリテーションスキルセミナー	2014年 3月12日(水)	増原、緒方

● 研修内容 (*印の項目は演習あり)

プレゼンテーション研修

- 「伝える」ということについて
- 伝えるべき「内容」の整理のしかた *
- 伝えるための「技術」の習得 *
- 伝えるための「手段」とは
- 学んだスキルの実践としての演習 *

ファシリテーション研修

- 会議について*
- ファシリテーションとはどういうものか
- 「場をデザイン」するスキル *
- ファシリテーションのための対人スキル *
- 議論の構造化に必要なスキル *
- 合意形成に向けたスキル *
- 学んだスキルの実践としての演習 * 3テーマ

ファシリテーションスキルセミナー

- ファシリテーションとは *
- ファシリテーションにおける1対1のコミュニケーションスキル *
- ファシリテーションにおける1対多数のコミュニケーションスキル *
- 学んだスキルの実践としての演習 * 1テーマ



スキル実践のためのワークショップ 「人間文化と地球環境のあるべき姿」 の実施記録

実施概要

● テーマ

「人間文化と地球環境のあるべき姿」

● 日時

2014年3月18日(火)

● 場所

地球研講演室

● 内容(チラシのリード文)

あなたは、地球環境問題を解決するためになにをしていますか？ また、なにをもって解決したことになるのかについて考えてみたことはありますか？ このワークショップでは、参加者が地球と人間の未来をともに考え、「人と自然の関係は、どうあるべきなのか？」という問いについて、ひとつの結論を出すためのグループワークを行ないます。参加者全員で、私たちの「未来可能性」を創りましょう。

● 募集定員 20名(事前申込制・先着順)

● 参加者

一般参加者 9名

地球研所員 13名 計21名

※午前中のみ参加2名



安成所長の開会挨拶

● プログラム

- 10:00-10:05 開会挨拶
安成哲三(地球研所長)
- 10:05-10:15 趣旨説明
熊澤輝一(地球研CRP情報基盤部門 助教)
- 10:15-10:35 議題提起
半藤逸樹
(地球研CRD基幹研究ハブ部門 特任准教授)
- 10:35-12:00 グループワーク①
〈昼食〉
- 13:00-14:00 グループワーク②
〈休憩〉
- 14:20-14:55 全体発表 約7分×3グループ
- 14:55-15:00 閉会挨拶
安成哲三



熊澤助教による趣旨説明。パワーポイントを活用して、ワークショップのねらいと作業手順をわかりやすく紹介



半藤准教授による議題提起では、未来可能性についてのアカデミックな背景を提示。また、作画を担当する東京藝術大学の学生が紹介された

ワークショップのようす

グループA



グループB



グループC



趣旨説明

ワークショップの実施に先立ち、参加者間で共有しておくべき事柄を整理した。今回のワークショップで明らかにすること、そのための作業項目、ワーク

ショップ技法導入の理由、企画全体の流れ、班のメンバーなどについて説明している。(熊澤輝一)

P01

趣旨説明

班分け(青字:地球研)

- A: 参加者、手代木、橋本、木下、飯塚、佐々木、寺田、宮川
- B: 参加者、松田、王、田嶋、阪本、小山、石川
- C: 参加者、増田、安富、ヤップ、川崎、橋川、村上、秋山、内山

総合地球環境学研究所 Research Institute for Humanity and Nature(RIHN), Kyoto, Japan

P02

今日は地球研が大事にしている キーワードについて考えます

地球研
では……

持続可能性

サステナビリティ

未来可能性

- 「持続可能性」とどう違うの？
- そもそも何だ？

INTER-UNIVERSITY RESEARCH INSTITUTE CORPORATION
INTERNATIONAL INSTITUTES FOR THE FUTURE/RIHN RESEARCH INSTITUTE FOR HUMANITY AND NATURE

P03

未来可能性って要するに何だ？ ワークショップを通して、みんなにわかって もらえる未来可能性の定義をつくります。

人間社会 人間社会と自然との関係 自然

現状
(1今問題になっていること
(2今私たちが頑張っていること)

持続可能性 望ましい状態
(こうあって欲しい、現状を改善した姿)

未来可能性 あるべき状態
(現状がどうだとかは1回忘れて、
そもそもこうじゃないよね)

INTER-UNIVERSITY RESEARCH INSTITUTE CORPORATION
INTERNATIONAL INSTITUTES FOR THE FUTURE/RIHN RESEARCH INSTITUTE FOR HUMANITY AND NATURE

P04

ワークショップとは？

- Workshop : (もともとの英語の意味↓)
「工房」「仕事場」「(共同)作業場」
いっしょに何かを作る所
- 講義など一方的な知識伝達スタイルではなく、参加者が自ら「参加」「体験」し、グループの「相互作用」の中で何かを学びあったり創り出したいする、
双方向的な学びと創造のスタイル
(参加体験型のグループ学習)
中野(2001)

INTER-UNIVERSITY RESEARCH INSTITUTE CORPORATION
INTERNATIONAL INSTITUTES FOR THE FUTURE/RIHN RESEARCH INSTITUTE FOR HUMANITY AND NATURE

P05

定義づくりの手順

手順①:「持続可能性の例と未来可能性の例を挙げてみる」

1. 「現状」—個人的な体験、報道を踏まえて現在の環境・自然について語って下さい。
例
 - 最近、問題だな、と思ったこと。
 - 改善しないといけないな、と思ったこと。
 - 環境に対して配慮していること。
 - 自然とのかわり
2. 望ましい状態—1が改善/さらに良くなった状態とは？
3. あるべき状態—2をもってしても改善されないことがあるとしたら、何?⇒これを議論しながら考えましょう。

手順②:「未来可能性とは○○である！」
120文字以内の定義(必須)+任意の方法で表現して下さい。

INTER-UNIVERSITY RESEARCH INSTITUTE CORPORATION
INTERNATIONAL INSTITUTES FOR THE FUTURE/RIHN RESEARCH INSTITUTE FOR HUMANITY AND NATURE

P06

今日の流れ

午前中	グループワーク1 「持続可能性の例と未来可能性の例を挙げてみる」
お昼	ごはん
13:00~	グループワーク2 「未来可能性とは○○である！」
14:20~	プレゼンテーション (7分)

INTER-UNIVERSITY RESEARCH INSTITUTE CORPORATION
INTERNATIONAL INSTITUTES FOR THE FUTURE/RIHN RESEARCH INSTITUTE FOR HUMANITY AND NATURE

議題提起

趣旨説明にひき続き、これまで地球研で行なわれてきた未来可能性に関するアカデミックな議論を紹介した。プロセス指向の未来可能性と目標指向の未来可

能性についての考えを提示しておき、その後のグループワークで発展させてもらうことを意図したものである。(半藤逸樹)

P01

18/03/2014
人間と地球の未来を考えるワークショップ～私たちの「未来可能性」を探る～

アカデミックなこと
CRD基幹研究ハブ部門 半藤逸樹

RIHN

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所
Inter-University Research Institute Corporation
National Institute for the Humanities Research Institute for Humanity and Nature

P02

「未来可能性」の歴史

- 2001年 日高敏隆地球研初代所長の提案
- 2006～2007年 英訳が「Futurability」に決まる
- 時間スケールと観察者効果を考慮(半藤逸樹)
- 2008年 地球研ワーキングペーパー(立本成文)
- 2010年 総合地球環境学ゼミナールで議論再開
- Handoh and Hidaka (2010)
• 「持続可能な寄生から未来可能な相利共生へ」
• Futures sustainability (Tonn, 2007)
- 大西健夫(2010) バックキャストイング
- 2011年～ 事実命題と価値命題(半藤, 2013)
- 2014年現在 商標登録準備中!

P03

参考: Humeの法則

- 事実命題「～である」と価値命題「～であるべき」
- 不可: 事実(現在) → 価値(現在)
- 可: 事実(過去・現在) → 価値(未来)
• “→”は1対1の対応である必要はない
- 例) 事実命題群→価値命題の候補
• 事実と価値は不可分(Putnam, 2002)
- Capability approach (Sen, 1985)
- ちょっとお膳立て
- 事実(現在)と価値(現在)は独立する
- 事実(過去・現在)により価値(未来)は更新される

P04

考え方①: プロセス指向の未来可能性

■ 人間社会と自然の関係の“ある(あった)姿(事実命題)”から、地球環境問題を解決するための“あるべき姿(価値命題)”を導くことは可能である

事実命題 F_p 未来可能性 f 価値命題 V_p

P05

考え方②: 目標指向の未来可能性

■ 人間社会と自然の関係の“ある(あった)姿(事実命題)”を踏まえ、“望ましい姿(価値命題)の候補から地球環境問題解決の可能性”を探ることができる。

事前 事後

未来設計 $P(V_p)$ $P(V_p|F_p)$ 未来可能性

価値 (疑似) バックキャストイング $P(F_p|V_p)$

事実 $P(F_p)$

現在 未来

時間

$$P(V_p|F_p) = P(F_p|V_p) \frac{P(V_p)}{P(F_p)}$$

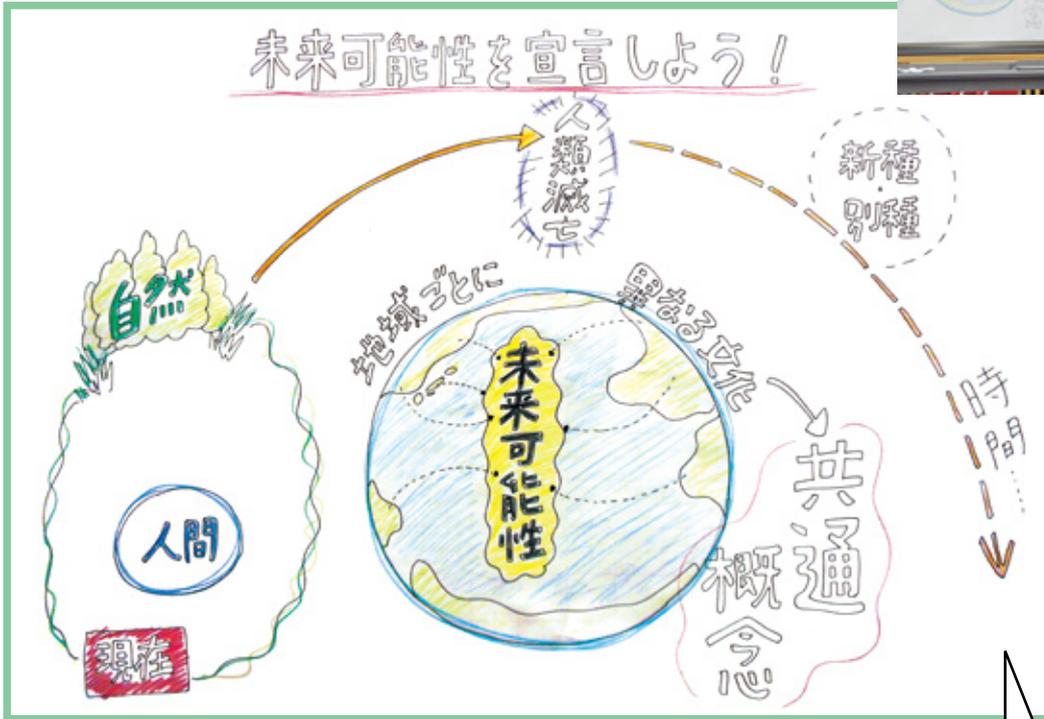
P06

「未来可能性」を宣言しよう!

- 「未来可能性とは〇〇である」(120文字)
- 未来可能性の定義
- 所長に宣言してもらおう!
- 3月24日(月)
- 東京国際フォーラム
- Twitterでも!

グループワークの成果発表

グループ A



未来可能性とは、地域ごとに異なるものである。地球全体で共通概念を共有すべきである。地域内で自然の恵みを生産消費し、そのためにも文化を維持する必要がある。人間は自然に負荷を与えるものであることを自覚したうえで、行動することで担保されるものである。

イラストにこめた思い そもそも地球の未来可能性に人類の存在は含まれるのか、人類は滅亡してもかまわないのではないかと議論からスタートした。ただし、「未来」という言葉はあくまでも人間の要素を含んでいるとみなし、人類が自然のなかで消費者として自らを意識しながら生きていく未来可能性について考えた結果をイラストにした。また、未来可能性は生産、消費、文化の単位である「地域」と全世界的な共通概念を有する点を重視した。ほかにも、時間スケールや、自然と人間の関係など、未来可能性を考えるうえで欠かせないパーツが組み込まれている。(橋本慧子)

作画担当の藝大生のコメント

「未来可能性」とは、私たちの住んでいる地域だけでなく、地球規模での共通概念であるということ、話し合いを進めていくなかで、定義づけたところから、それを表すイメージを中心に作画しました。「未来可能性とはなにか」というところからのスタートだったので、話し合いに重点を置き、班全体の認識を共有していくところを大事にしました。(木下真彩)

●●●●●●●●●● 定義を「イラストで表現する」ことのねらい ●●●●●●●●●●

未来像や未来可能性のイメージを共有するため、またグループ内での議論の活性化のために有益だと考え、グループ・ディスカッションにイラストを活用することを試みた。

さらに、翌週の2014年3月24日(月)に控えた国際シンポジウム『地球環境のあるべき姿』の探求におけるツイッターを活用した議論のなかでの紹介を想定し、「未来可能性とは、○○○である」を120字以内で表現することを、グループ・ディスカッションの共通のゴールとした。

なお、このようなイラストを用いた手法は、本事業のためにこのワークショップを企画した半藤逸樹(CRD)と熊澤輝一(CRP)が

参加した“Postcards From the Future: Implications of Big Data for Science and Society” (東京大学2014年2月15日)で使用されたもので、そこに参加していた東京藝術大学美術学部デザイン科の3名の学生の協力のもとに、この作業を行なった。

(半藤逸樹)

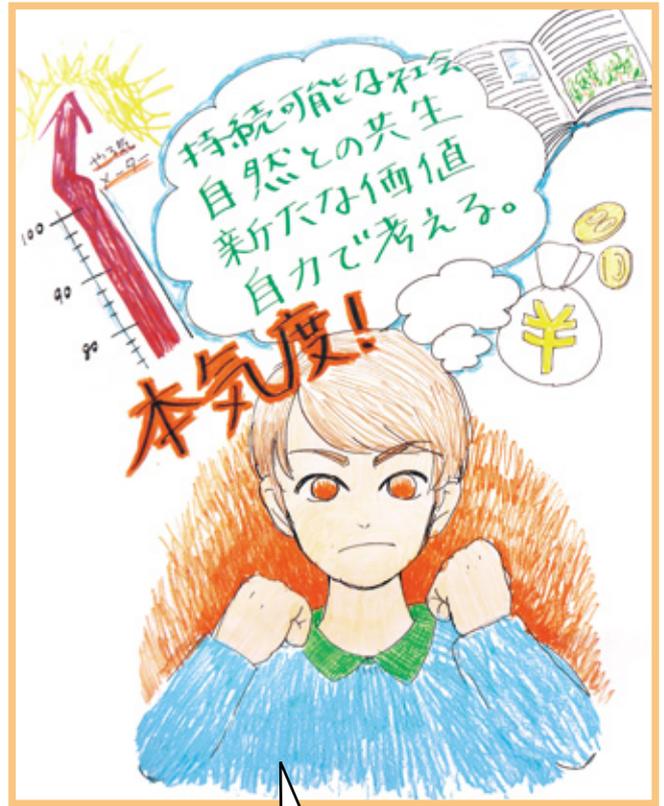




グループ B

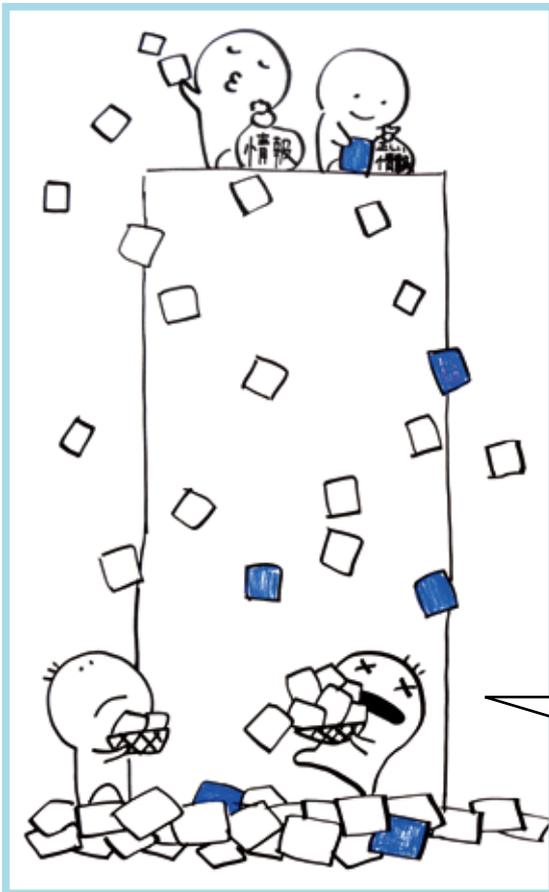
未来可能性とは、人間社会が、自然と共生し持続可能な社会をめざした新たな価値にもとづく教育や経済などのしくみをつくり、自力で考え、問題を解決することへの本気度を示すものである。

イラストにこめた思い イラストはあるべき社会の姿を本気で考える男の子を表している。未来の可能性は、なによりも私たちがそれを求める真剣さに応じてふくらんだりしぼんだりする。一人ひとりの考える力がアップすれば、困難な状況を打開するアイデアや理想の社会像もそれだけ豊かになる。だから、未来可能性とは、地球環境問題や資源を大量に消費する今日の文明のあり方を先送りせず、自然の恩恵を享受し続けることができる社会の構築に取り組む本気度である。(王智弘)



作画担当の藝大生のコメント 絵を描くといっても、まずは議論の流れを理解しなくてはいけない。議論の成果を言葉だけでは理解するのは難しいので、重要な役割であったと考えている。しかし、今回のワークショップは抽象的な言葉のワークショップであったため、イラストを描くのににより技術が必要となった。もっと技術を磨いて役割を果たしたい。(田嶋晃子)

グループ C



未来可能性とは、膨大な情報から、科学的知見とくらしの智慧にもとづいた正確な情報をひとりひとりが総合的に取捨選択し、行動する力を養う教育が全世界すべての世代にゆき渡っており自然と精神が健全な姿に保たれている状態である。

イラストにこめた思い 大量生産・大量消費の問題、それに付随して起こるごみ問題やエネルギー問題などの問題解決のためには、個々人の環境に対する意識の向上が重要だと考えた。先進国では環境教育がさかんになっているが、情報化が進むいま、膨大な情報から正しい情報を選びだす力は、大人にも必要である。いっぽうで、世界中には十分な教育を受けられない子どもも多くいる。「全世界の全世代の人が正しい情報を選べるような教育を」という願いがこめられたイラストである。(安富奈津子)



作画担当の藝大生のコメント あるていどグループの意見がまとまらないうちに、絵に取りかかれないので、時間との戦いでした。しかし、抽象的だったテーマにイラストのまとめが入った瞬間、具体的な一つの形となり、いまままで話し合ってきた内容が一気につかみやすくなったので、わかりやすく人に伝えることの大切さをあらためて実感できました。(川崎美波)

総括

今回のワークショップの題材として、「未来可能性」を選んだのは、所内での議論の活性化を意図しただけでなく、2014年3月24日(月)の地球研「未来設計イニシアティブ国際シンポジウム2014:『地球環境のあるべき姿』の探求」に向け、「未来可能性」を参加者と共有したかったからである。

ワークショップを全体から見ていた感想をいえば、「あるべき状態」を考えるのはとても難しく、多くは希望を投影したにすぎない見せかけの規範を議論する展開に陥る場面が多かった。われわれの価値や行動は、「ある状態」(事実)によって影響を受け、そのうえで価値を生み出し、規範をつくっているのだという流れを観察できた。

とはいえ、各グループが考えた右記の「未来可能性」にはそれぞれに個性があり、価値の多様性があらわれた結果となった。

グループA

未来可能性とは、地域ごとに異なるものである。地球全体で共通概念を共有すべきである。地域内で自然の恵みを生産消費し、そのためにも文化を維持する必要がある。人間は自然に負荷を与えるものであることを自覚したうえで、行動することで担保されるものである。

グループB

未来可能性とは、人間社会が、自然と共生し持続可能な社会をめざした新たな価値にもとづく教育や経済などのしくみをつくり、自力で考え、問題を解決することへの本気度を示すものである。

グループC

未来可能性とは、膨大な情報から、科学的知見とくらしの智慧にもとづいた正確な情報をひとりひとりが総合的に取捨選択し、行動する力を養う教育が全世界すべての世代にゆき渡っており自然と精神が健全な姿に保たれている状態である。

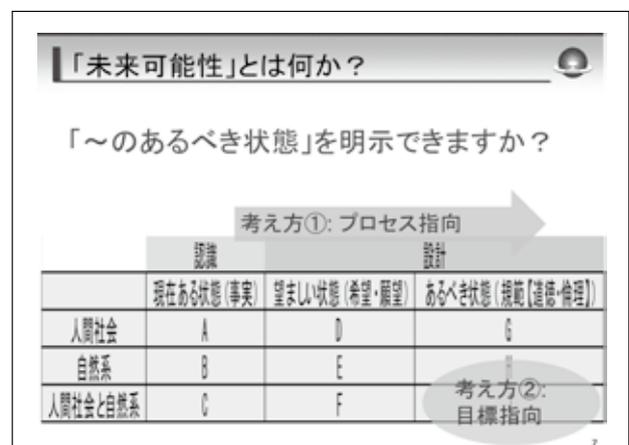
定義の中からキーワードを抜き出してみると、

- A** 地域、地球、地産地消、自然の恵み、文化、人間活動による負荷、行動、担保
- B** 共生、持続可能、新たな価値、教育、経済、自力、問題解決、本気度
- C** 情報、科学知、くらしの知恵、総合的に取捨選択、行動力、全世界、全世代、自然の健全性、精神の健全性

のような構造をもつ。

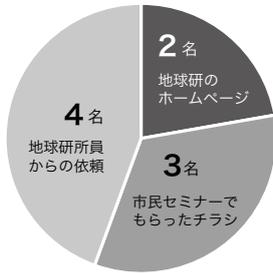
Aグループは里山論、Bグループは価値創生、Cグループは統合論のようにみえなくもない。多くは、環境教育や「持続可能性」の枠組みで一度は語られる内容であり、われわれは自由な未来を考えられなくなっているのではないかと思える。われわれの未来のビジョンは、「持続可能性」という言葉に支配され続けたわれわれの価値判断にもとづいているともいえる。

持続可能性という言葉に縛られずに未来を語れるようになることが、未来可能性の具現化なのではないか。グループBの「本気度」は、新しい可能性を示すものの一つではないか。今後、われわれがファシリテーション技術を磨くことによって、より生産的なワークショップを行ない、参加者の議論のなかで、「人間と自然系の相互作用環」に新しい価値を見出していくことに期待したい。(半藤逸樹)

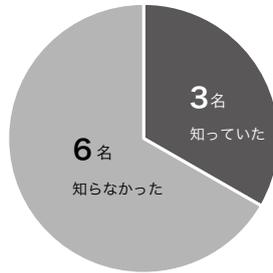


一般参加者の感想

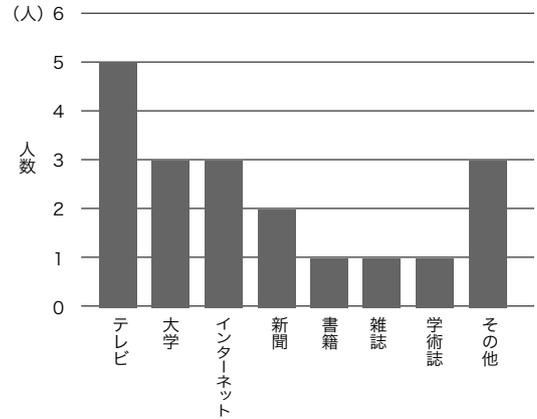
Q. なにをみて、参加をきめましたか(単一回答)



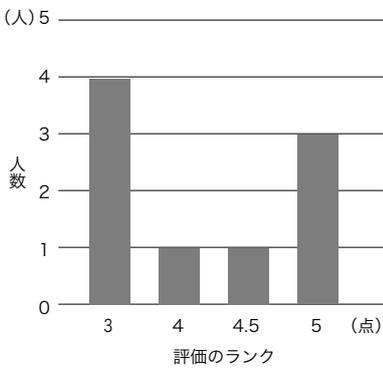
Q. 「未来可能性」という言葉を知っていましたか



Q. 普段、地球環境問題についての情報をなにかから得ていますか(複数回答)



Q. 今回のワークショップを5段階で評価すると?



- 3
 - 地球研目線のテーマ設定だった。
 - インストラクションがよくなかった。ファシリテーターが機能していなかった。
 - 地球研の学術成果の不足を感じた。
- 4
 - いろいろな人の考え方が聞けた。
- 4.5
 - 自分の意見をたくさん言うことができた。
- 5
 - とてもおもしろかったが、難しかった。

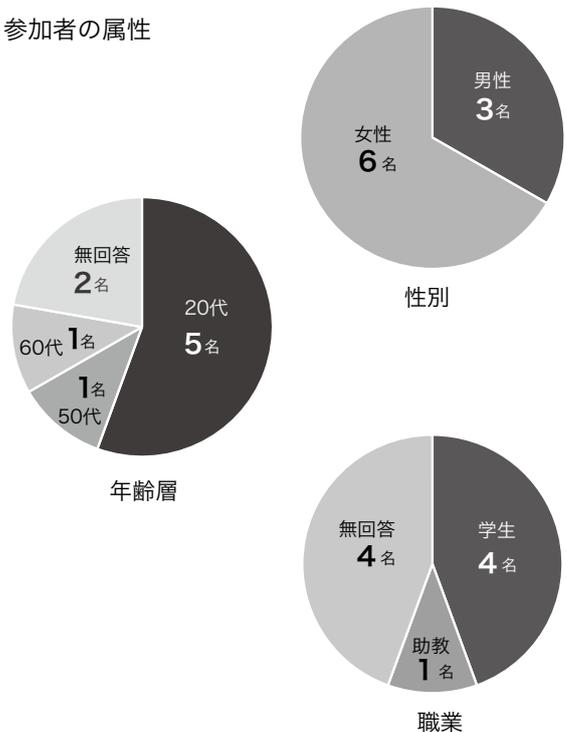
Q. ワークショップのなかでいちばん印象に残ったものは?

- 土台から違う考え方を聞くことができたこと
- 班ごとに視点がまったく異なっていたこと
- 絵を描く人が来ていたこと
- 未来可能性に関するアプローチの方法のアイデア
- 地球研の研究者が言葉の定義の段階で悩んでいて意外だったこと

Q. ワークショップをつうじてどのような感想をもちましたか

- 研究者はすごいと思った反面、実社会で働いている人と接していないため、知識の偏りを感じた。
- グループワークは参加しやすいものであった。
- Cグループに所属し、最後のまとめに時間がかかったため、ほかのグループの発表がゆっくり聞けなかった。
- 地球や人間全体の話かと思ったけれど、日本の身近な問題に終始してしまった。国際的な話に発展すると別の展開があるのかもしれない。
- 環境系の雑誌ではイラストがもちいられているものが多いので、そのようなものを期待して参加した。
- 議論を絵にするのはたいへんだけれど、うまく絵にできてよかった。

参加者の属性



「育成事業」参加所員の感想

研修後の感想「研修ふりかえりレポート」からの抜粋

■プレゼンテーション研修

どのようなことを業務に活かしていきたいと思いますか？

- ワークショップ運営
- 研究発表
- 研究資金獲得や自治体との連携事業などの事業計画の説明
- 市民の方への説明
- 伝える構成についてはトレーニングを、デザインについては意識をしながら、今後は相手やオーディエンスに応じてゼロベースで考えられるようにしたい。
- プレゼンでの伝わりがたさが理解できると同時に、「配慮」というものを見つめ直す機会になった。姿勢や言葉だけでなく、所作やふるまいなどにも気をつけること。「対象者を事前に調べる」こと。
- 自分がプレゼンをするときに陥りがちな問題点を意識して、次の発表に活かしたい。
- 発表時のクセ、見られ方がよくわかったので、今後改善したい。

自由記入

- 普段の業務を離れて、自分のプレゼンを客観的に見直す機会となった。

■ファシリテーション研修

どのようなことを業務に活かしていきたいと思いますか？

- 傾聴のスキルを身につけること。
- シーンと静まって、参加者がなにを考えているのかわからない会議にならないよう、会議をファシリテートできるようにしたい。
- 少人数でミーティングをするところから、参加者全員と、とくに自分の話し合い満足度を上げたい。
- 会議時に、会議の目的・ルールを明確にし、ホワイトボード等を書いておくこと。
- 参加者どうしでの議論が盛りあがるようなファシリテーションをめざして、教えていただいたことを活かしたい。
- タイムキーパーを置くこと。「～分までに～をする」といった時間管理を徹底したい。
- ゴールの設定、ルールの設定、宣言、時間管理等のすぐにもでも応用できそうな点を活かしたい。
- 発言者一人ひとりの意見をくみ取り、より良いソリューションへ結びつけられるようにしたい。
- 上手な返し方、つなげ方を場数を増やしつつ修得したい。

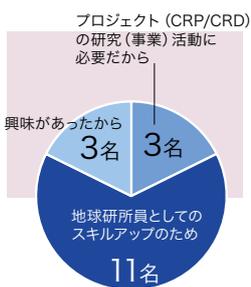
自由記入

- 本研修が、一過性のものにならないようにしたい。
- ワークがおもしろかった。
- 最後の落とし方(合意での決め方)のコツを詳しく知りたい。

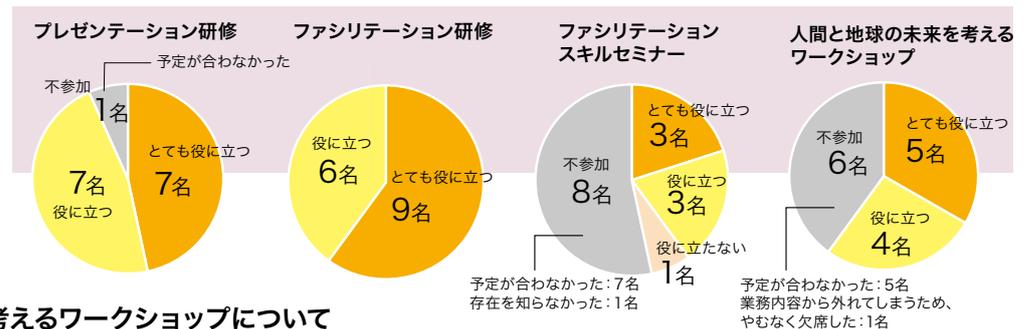
育成事業全体をつうじての感想

■研修について

参加の動機

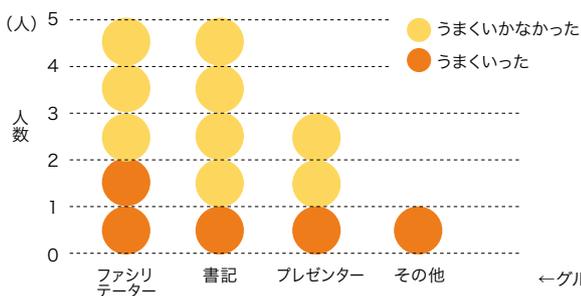


研修内容は役に立ちましたか

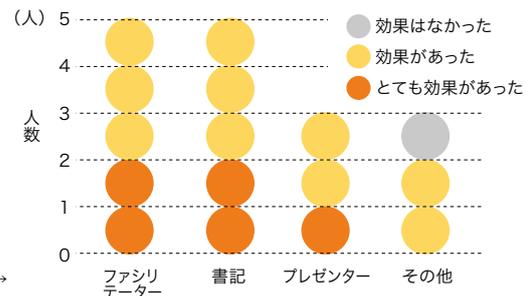


■人間と地球の未来を考えるワークショップについて

グループディスカッションにおけるファシリテーションについて



スキル実践の場として

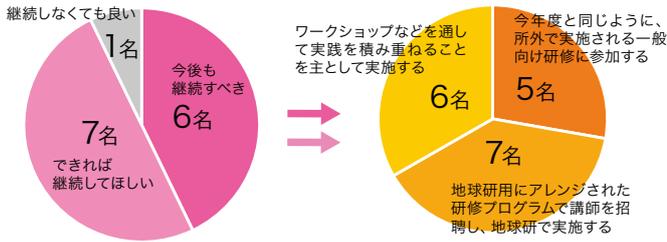


■今後について

プレゼンテーション研修

今後も継続したほうがよいですか

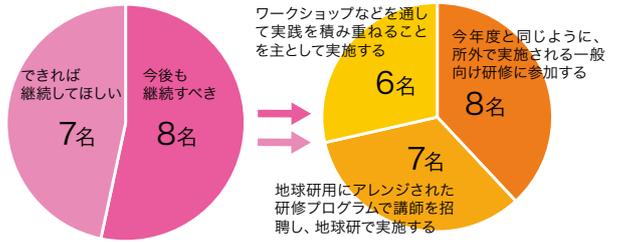
望ましい研修のスタイルは？



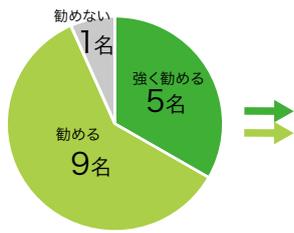
ファシリテーション研修

今後も継続したほうがよいですか

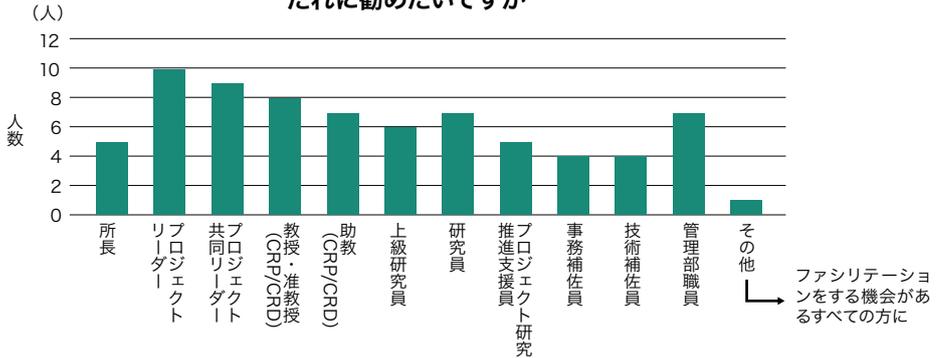
望ましい研修のスタイルは？



研修を所員に勧めますか



だれに勧めたいですか



研修について

■プレゼンテーション研修

受講してよかったと思うところ

- プレゼン姿をビデオで撮影され、ビデオを見ながら講師および参加者から意見をいただいた。
- 実践的演習が多く練習になった。
- 研究活動をつうじて学んだことと共通することが多いが、知っていても実践できていないことのよい確認になった。
- 自分のこれまでのプレゼンテーションについて、どの部分が欠けていたのかを把握できた。
- 後日に行なったプレゼンテーションで、要点の整理からプレゼン全体の流れの調整など、参考にすることができた。
- 目線や間合い、時間配分などをチェックしていただけた。
- 自分では気づけなかった自分自身のプレゼンテーションの特徴を知ることができた。
- これまでの自分のプレゼンテーションの弱点があった。
- プレゼンについては、普段からしていたが、なにが大事なのか大きなポイントを知ることができた。
- 他分野・業界の方たちの手法が参考になった。意識すべきところがわかった。
- 自分のプレゼンテーションの癖を把握できた。

受講しなくてもよかったと思うところ

- 知っている内容の説明が多かった。

■ファシリテーション研修

受講してよかったと思うところ

- ファシリテーターとコーディネーターの違いを意識できた。
- 実践的演習が多く、練習になった。また、じっさいに会議などにいそうな「困ったタイプ」を想定した対処法があった。
- 会議を円滑に進めるうえでは、ファシリテーションの技術的な部分だけでなく、会議の位置づけから考えるという点に感激した。
- 会議運営上のヒントがとて多く、有用な知識が得られた。いっぽうで、「敵をつくってしまったら議論にならない」という教訓も得られた。
- ファシリテーターの意義と実践的な技術を学べた。
- 言い返し方のコツを学んだ。
- 参加者どうしの対話を促すことの難しさと、それができていなかったことを理解した。
- 課題の多さに気づいた。
- ファシリテーションについて知らなかったが、ファシリテーターの意識、役割、スキル、要点などを学ぶことができた。
- ファシリテーションの基本が理解できた。ロールプレイが興味深かった。
- ファシリテーションのルールがわかった。向き・不向きではなく、スキルである。経験を積みばうまくなれるとわかった。

受講しなくてもよかったと思うところ

- 自分の所属する部門では有効活用する場が存在しない。
- プレゼンテーション研修と同じ内容があった。ただし、ほんの一部で、流れも違ったので問題ない。

研修について(つづき)

■ファシリテーションスキルセミナー

- 受講してよかったと思う理由
- ファシリテーション研修の復習になった。
 - インソースの研修にくらべ、体系的にまとめられており、ファシリテーションの理論的側面がよくわかった。
 - 経験を積むことはできた。
 - ファシリテーション・グラフィックの基礎を学ぶことができた。
 - ほかの業界の方がたの手法が参考になった。テキストが役に立つ。今後のファシリテーションの準備に使える。
- 受講しなくてもよかったと思う理由
- ファシリテーション研修とほぼ同じ内容で、むしろこちらの方が内容において劣る印象であった。
 - 前回のセミナーとほぼ同じ内容であった。
 - 論理的な部分の説明が多すぎた。

■人間と地球の未来を考えるワークショップ

- 参加してよかったと思う理由
- ファシリテーションを受講後はじめて実践して、なかなかうまくいかず反省点が見えた。
 - ファシリテーションを実践し、研修の成果を試すことができた。
 - 所内で未来可能性を議論できた。
 - 一般の方も参加したのでとてもよい経験になった。どうなるかわからないところで、うまく工夫するという経験になった。

人間と地球の未来を考えるワークショップについて

■グループディスカッションについて

- 「うまくいった」と思う理由は？
- 定義は、120文字にまとまった。
 - グループの全員が発言した。議論が進む感じがあった。
- 「うまくいかなかった」と思う理由は？
- 研修で学んだことを活かしきれなかった。
 - ワークショップを思いどおりに進められなかった。
 - 午前中のグループワークを担当したさいに、目標に到達できずに終わってしまった。
 - 議論が散漫になり、まとまりづらかった。時間がうまく配分できなかった。
 - 事前の準備が足りなかった。時間の配分、参加者と議論テーマのバランスが悪かった。
 - グループワークに加わるべきだった。

■スキル実践の場として

- 「効果があった」と思う理由は？
- 実践の回数が必要であることを実感できた。
 - 具体化や、話題の展開を促すなど、いくつか意識したことが実践できた。
 - ファシリテーションの経験を積めた。
 - 全体の合意形成に少しは役に立ったと思える。
 - スキルがまだ身につけていないことがよくわかった。
- 「効果がなかった」と思う理由は？
- プレゼンテーションは実践できたが、ファシリテーションの機会はなかった。

その他

- ファシリテーション研修とファシリテーションスキルセミナーは内容がほぼ同じで、なぜ両方を受講する必要があったのかわからない。今回の研修は、あくまでも純日本人だけで構成されるビジネス・シミュレーションを想定しているの、国際的・学術的な会議の場では応用できない技術も多かった。地球研職員にふさわしい内容に改善されれば、また受講したい。
- 研修に参加しただけで、すぐに超学際コーディネーターとして完成・活躍できるわけではない。コーディネーターの育成には、多くの「実践の場」も必要であり、かなりの時間をかけて、できれば専任で取り組むことも必要である。日本科学未来館のサイエンス・コミュニケーターの取り組みは、参考になりそうだ。
- 別途、「管理者向け講習会」を実施できるとよいのでは。
- 所外での研修は、「研究者以外の方に説明する」ときのために役に立つ。ワークショップの企画段階からファシリテーターに加わって、つくりあげるほうがよいかもしれない。
- 小規模なワークショップでもよいから、実践の場があればよい。
- この事業の共同企画者の一人として反省すべき点が多い。今後は業者のコンサルティングを受けつつ企画立案すべき。
- 研修で得たものを復習し、実践で活かした。各プロジェクト内でもファシリテーションやプレゼンの意識を共有し、会議の場で実践できればよいと思った。意識が共有されなければ、フォローしあったり、次回は改善しようという前向きな雰囲気にならない。意識共有+実践が大切だ。
- 今日のワークショップはとても勉強になった。
- もう少し議論しやすいワーク設定がよかった。事前にプレゼン資料があれば、話の進め方などを深く検討できた。
- これまでは、司会者とファシリテーターとの区別がついていなかったが、研修を受けて、ファシリテーターの定義が明確になった。おかげで、研究会やセミナーでみずからファシリテーターの役割を担うときのふるまい方が理解できた。所員のスキルアップを促し、地球研の〈色〉をもっとうちだすには、こうした研修を受ける機会を全所員に平等に与えるべきだと感じた。このような研修制度は、個人の専門能力を向上させる研修にも門戸を拡げるほうが、地球研全体の質の向上に役立つのではないだろうか。

講師紹介

原由紀子 株式会社インソース 講師

経歴

1993年 株式会社エヌ・ケー・エクサ入社
 1994年 株式会社イーオン入社
 1999年 株式会社イーオンの関西支部長に就任
 2004年 研修講師・コンサルタントとして独立
 2007年 株式会社インソース講師に就任



■ファシリテーションとは

チームの活動のプロセスに介入し、その活動を促進、チームワークを引き出し、チームの成果を最大化するものである。二つの側面からの二つのプロセスにかかわる。一つは、段取り、進行、プログラムといった、活動の目的を達成するための外面的なプロセス。もう一つは、メンバー一人ひとりの頭や心の中にある内面的なプロセス。ファシリテーターは両方のプロセスにかかわることで、人と人の相互作用を促進し、チームの成果を最大化するものである。

■総括

本プログラムにおいて、重要視されたポイントについての評価は、以下のとおり。どのチームもさまざまな話が自由にできていたのでとてもよかった。

項目	具体的な行動例	評価 5段階
役割認識	話し合いのなかでファシリテーターが自分の意見を差し挟んでいないか(挟みすぎていないか)	3
介入	議論が建設的でなくなってきたときに、介入し、会議をコントロールできているか	2
構造化	会議で出た意見をまとめ、そのなかから要点をみつけているか	2

●役割認識

部分的にファシリテーター(以下F)が介入できていなかったり、参加者になってしまったり、というところはあるが、どのFもグループの活動を促進しようという姿勢で取り組んでいたことはよかった。

●介入

今回の参加者は、研究者などが多く、持論を展開するタイプの方が多かった。それに対し、深掘りする質問などができていなかったことがあった。しかし、要約をしてうまく介入できていたことも多く、研修で学んだことが発揮できていたといえる。

●構造化

言葉の前提を確認できていたり、ポストイットを使ったり、表にしてわかりやすくしようという取り組みがみられたことはよかったが、効果的にできたか、という疑問がある。ただし、これは数多く経験をし、構造化のツールを使い慣れることが必要である。これからはぜひこれらのツールを使って実践してほしい。

〈所感〉

研修で学んだ役割分担などが実践できていたことがよかった。傾聴の姿勢や要約などをすることで話し合いを進めていく姿勢があり、その場を大切にしている姿勢がFのあり方としてとてもよかった。今回の経験をステップとして、どんどん実践練習してほしい。

■今後の課題およびアドバイス

- ワークショップを企画する段階で、「目的、目標、(前提)」をメンバーで共有することが大切。それに沿ったプログラムデザインをする必要がある。各ワークにも、「目的、目標」がある。自己紹介もその一つ。限られた時間のなかで目的、目標を達成するためにもっとも効果的な手段を選びたい。
- 今回は「未来可能性の定義」が目標であったが、それにゆきつくためには、「持続可能性」についてはメンバーのなかでの共通認識を確認しておく必要はあったと思う。
- 話しあいに必要な「目的、目標、前提」を共有するだけでも、話しあいは変わる。
- 今回の目的であれば、一日のプログラムとして、前半をワールド・カフェ、後半をビジョン・メイキング

参考図書

『ファシリテーターの道具箱 ― 組織の問題解決に使えるパワーツール49』 森時彦/ファシリテーターの道具研究会(著)
『ワークショップデザイン ― 知をつむぐ対話の場づくり』 堀 公俊/加藤 彰(著)

グとしてもよかったと思う。

- 構造化については、構造化ツールの使い方、書き方をいろいろ試してほしい。表は、書く場所によっても参加者からの見え方が変わる。字の大きさやペンの太さでも違いがある。そして、それぞれ「目的」があって使い分ける必要がある。ポストイットも、使うことが目的ではなく、話しあいを整理したり、「見える化」する狙いがある。
- 備品については、ボードマーカーは書けるものを確認しておくこと。マジックは油性ではなく、紙用マッキーや、プロッキーペンなどの裏写りのしないものが好ましい。

*

これからがスタートといえる。いろいろ試してほしい。(原由紀子)

講師によるフィードバック

ワークショップ終了後に、原由紀子講師によるフィードバックの時間を設けた。はじめに、「目的」と「目標」の違いを復習し、本日のワークショップの「目的」と「目標」を再確認した。その後、「ふりかえり」の方法を説明していただき、じっさいにグループごとに実践した。

ファシリテーションのふりかえりでは、「KPT」という方法がよく使われるということを知った。KPTとはKeep、Problem、Tryの頭文字をとったものであり、Keepは良かった点・今後続けたい点、Problemは改善すべき点、Tryは次回挑戦したい点である。

このふりかえりの方法は、良い点や悪い点のみにかたよらない、次回のファシリテーションにもつなげる方式である。実践のポイントは、書くことによって「見える化」しながら進めることである。

まずはAグループで、「場をつくる」スキルについて講師とともにふり返った。次に、講師からグループごとのフィードバックをいただいた。

グループA キーワードをカテゴリ別に書きながらすすめることで、話をしやすい場づくりができていた。時間のめやすを参加者に伝えていた。

グループB プログラムデザインを考えられていた。話のかじとりがうまくできていた。午前中に目標までゆき着いていた。

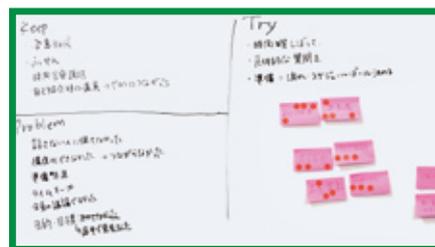
グループC 表を使い、「見える化」していた。

これらの評価を参考に、各グループに分かれて15分間のふりかえりを行なった。グループ内で話しあいなが

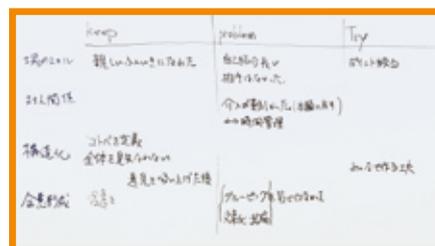
2014年3月18日(火)15:00~16:00 地球研 セミナー室1・2にて

ら、本ワークショップでのKeep、Problem、Tryにどのようなものがあるかをホワイトボードに書きだした(写真)。

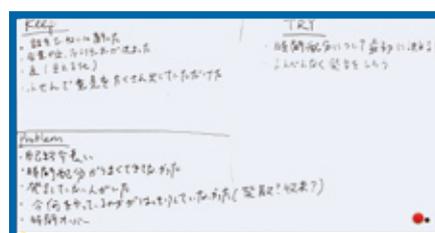
ファシリテーションにおいては、各自、各回、各フェーズの目的・目標を考えながらプログラム・デザインをすることが重要である。くわえて、終了後に「ふりかえり」をすることで、優れたファシリテーターへとスキル・アップすることができる。



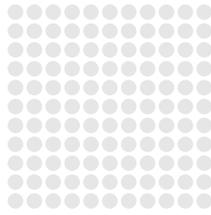
グループA



グループB



グループC



おわりに

東日本大震災から3年が経過した現在も、被災地域では復興計画が議論され続けている。地球研の研究者も、被災地に足を運び、復興計画に関する会議に参加している。多種多様なステークホルダーが、復興という目的に向かって議論を続けること、つねに「科学と社会の連携」が起こっていることを考えると、震災は超学際性や問題解決型研究を活性化した契機にもみえる。

しかしながら、ステークホルダー会議というのは、得てして合意形成が困難なこともあり、ときには激しい対立構造を生むものである。復興が遅々として進まない地域は、つねにこの類の問題を抱えているのではないか。

「超学際研究コーディネーター育成事業」は、地球研の比較的若い職員が目的意識をもって企画・運営した事業である。彼らは、超学際研究以前に、研究者だけの学際研究でも、合意形成の困難さを経験してきた。ノイジィ・マイノリティに議論を押し切られ、サイレント・マジョリティの価値が一向に反映されないプロジェクト形成過程を経験してきた。だからこそ、会議の場での効果的なプレゼンテーション技術やファシリテーション技術の習得に、プロジェクトリーダー陣よりも積極的なのだと思う。

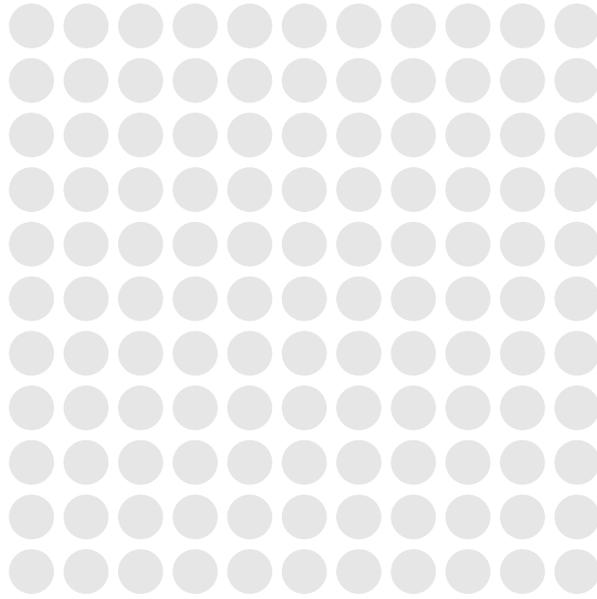
この類の企業研修への参加は、大学では事務系職員の研修の一環として利用されることが一般的で、教員や研究者が参加することは稀であるという。本事業のアンケート結果には、「プロジェクトリーダーや管理職の参加を期待する」という意見が多かった。「地球研には、優れた超学際研究コーディネーターが多い!」という声が外から聞こえてくるまで、さらには、環境教育のプログラムで学生にファシリテーション技術を教える研究者が出てくるまでは、本事業を続ける意義があるのかもしれない。

本報告書を一読し、この事業の成果が、地球環境問題の解決に資するさまざまな活動につながってくることを想像していただければ幸いである。

2014年3月20日

総合地球環境学研究所 研究推進戦略センター長

窪田 順平



発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

総合地球環境学研究所

研究推進戦略センター

基幹研究ハブ部門

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4

電話 075-707-2100(代表)

URL <http://www.chikyu.ac.jp>

発行日

2014年3月28日

